

現代トルコのアラブ・アレヴィー研究動向

山崎 暁*

Research Survey on Arab Alevis in Contemporary Turkey

YAMAZAKI Satoru

This paper aims to examine previous studies on Arab Alevis in contemporary Turkey. Arab Alevis, an Arabic speaking minority with an Ali-oriented Islamic faith as their name indicates, inhabit mainly the south-eastern part of Turkey facing the Mediterranean. In scholarly history, they have been better known as their general appellation in the Islamic world: Nusayris or Alawis. As an ethnic group with its own religious origin back in 9th century Iraq, distinction should be made carefully from other Turkish or Kurdish Alevis of Anatolia.

Only a few studies focused specifically on the Arab Alevis have been done until recently compared to those on the Nusayris/Alawis in general or the Syrian Alawis. While this previous situation is apprehensible as a reflection of the difference between the Arab Alevis and the Syrian Alawis in their political presence in each nation, we have witnessed a marked increase in the number of publications and studies on the Arab Alevis especially since 2000.

Those works can be broadly categorized into two groups: the first one is books written by Arab Alevi sheikhs on their religious creed or history, which should be taken as sources for future study. The second one is academic or pseudo-academic works among which a considerable number of studies based on historical documents or field research in Arab Alevi communities can be found. In this paper, I will focus on the latter academic studies that have shed much needed light on the public/private life of Arab Alevis in contemporary Turkey.

1. はじめに

本稿の目的は、現代トルコのエスニック集団のひとつであるアラブ・アレヴィー (Arap Alevi)¹⁾に関する研究動向を概観し、既存の研究の視座を把握するとともに、今後の研究に向けた展望を示すことである。

本稿が対象とするアラブ・アレヴィーは、一般にイスラーム世界における次の集団と同定されている。すなわち、シーア派イスラームの思想潮流において、アリーの子孫の神格化といった多数派からみて特異な教義をもつために周縁化され、グラート(極端派)と他称されてきた少数分派のひとつであるヌサイリー (al-Nuṣayrīya) またはアラウィー (al-A'lawīya) である(以下、本稿ではヌサイリー／アラウィーとする)²⁾。9世紀のイラクに起源をもつとされる同派の歴史的故地は、現在のシリア北部海岸地帯からトルコ南東部の地中海に面したキリキリア地方にかけてである。第一次大戦後こ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

- 1) トルコ語では Arab が Arap と発音・表記される。本稿では混乱を避けるため、アラブ・アレヴィーとはせずアラブ・アレヴィーで統一する。
- 2) 近年の代表的なヌサイリー／アラウィー研究としては、思想史の分野では [Bar-Asher and Kofsky 2002]、より広く歴史、教義、アイデンティティなどのテーマを体系的に扱ったものとして [Friedman 2010] がある。イマームの神格化を中心に三位一体説、輪廻思想など多数派からみて極端とされる教義をもつ同派は、しばしばそのイスラーム性がイスラーム世界の内外で疑問視され、混濁性が強調されてきた。しかし、近年でも一定の進展をみている同派の思想史研究では、その中心的思想がイスラーム思想史上の伝統の枠内で捉えうるものであることが明らかになりつつある。こうした同派の思想史的位置づけをめぐる論点については [菊地 2014] が詳しい。

の地域に新たな国境線が引かれた結果、彼らのコミュニティも分散して新たな国家に包摂され、それぞれ異なる社会的文脈のもとで変容を経験してきた。本稿で用いるアラブ・アレヴィーという呼称は、彼らの信仰を示すアレヴィーにあえてアラブという形容詞が冠せられていることが示すように、特に現在トルコ共和国の国民として暮らしているヌサイリー／アラウィーを指して近年用いられることのある自称または他称である。こうした呼称が用いられている背景には、後述するようにトルコにおいて「アレヴィー」という社会範疇がもつ複雑な性質が存在する。

アラブ・アレヴィーのコミュニティはトルコ南東部地中海沿岸のハタイ、アダナ、メルシンの各県に集中し、その人口については正確にはわからないものの、数十万人規模であると推定されている[Andrews 1989: 151]。ヌサイリー／アラウィーが総人口の約12%を占めるとされ、同派出身者が重要な政治的立場にある隣国シリアと比べると、トルコにおける彼らはさらに小規模のマイノリティとして暮らしている。この点で、彼らが国内においてほとんど社会的影響力をもたないという研究者の評価は正当なものであろう[若松 2010: 1; Van Bruinessen 1996: 3]。

こうした事情が背景にあり、ヌサイリー／アラウィー研究において、アラブ・アレヴィーはこれまでほとんど注目されてこなかった[Mertcan 2013: 9; Procházka-Eisl and Procházka 2010: 24]。また、1990年代中頃から2000年代にかけて彼らのコミュニティでフィールド調査を行ったヨーロッパの研究者も、アラブ・アレヴィーに関するそれまでのトルコ国内の言論状況について、彼らを①「トルコ化」する、②無視する、あるいは③周縁化するという三つのいずれかの態度がみられたと指摘している[Procházka-Eisl and Procházka 2010: 72]。

しかしながら、90年代以降、特に2000年代に入り国内外でアラブ・アレヴィーに関する研究・出版には顕著な増加傾向がみられるようになり、この研究領域が突如として活況を呈している。こうした変化の背景のひとつには、若松の指摘するように、トルコにおいてそれまで国民統合の観点からタブーとされてきたエスニック・マイノリティに関する言論・研究に対する規制が1990年代に入り緩和された[若松 2013: 28] ことがあると思われる。とりわけ、アラブ・アレヴィーとは歴史的・民族的背景が異なるものの信仰や社会的立場に共通項のあるトルコ系、クルド系のアレヴィー³⁾の一部の人々がワクフ(vakfi)やデルネキ(dernek)と呼ばれる市民団体の活動を通じ自らのアイデンティティや信仰の再定義を積極的に行い始めるのに続く形で、アラブ・アレヴィーの組織化や関連書籍の出版も徐々に活発化していったと考えられる[齋藤 2012: 186]。

90年代以降増加した研究・出版は、アラブ・アレヴィーのシェイフ(宗教・社会的指導者)による彼らの信仰や歴史認識等について記述した著作と、国内外の研究者による学術的な(あるいはそのような体裁をもつ)研究に大別することができる⁴⁾。本稿は後者の学術的な研究を記述の対象とするが、そのなかでは史資料を用いた実証的な歴史研究が行われ始めているほか、特に人類学・社会学などを専攻する研究者によってフィールド調査に基づく研究が複数発表されていることが注目に値する。後に紹介するように、このなかには修士論文ではあるが高い学術的意義をもつものも含まれる。また、フィールドのデータに基づく実証的な現代研究は既存のヌサイリー／アラウィー研究において空白となっていた部分でもあり、本稿で扱う研究動向は同派研究全般においても重要なものである。以下本稿では、2章でこれまで多くの研究が論じているアラブ・アレヴィーの呼称に関する問題を整理した後、3章と4章でそれぞれ史資料とフィールド調査に基づくアラブ・アレヴィー

3) 多数派のスナナ派とは異なる信仰をもち、「アレヴィー」と総称される人々は、トルコ共和国人口の約15~20%を占めるとされる。そのうちのほとんどは、トルコ語あるいはクルド系諸語を話す人々である[若松 2010: 1]。

4) 本稿では扱わないシェイフの著作群にみられる主張に関する研究として、[Üzüm 2000]がある。

研究の動向を紹介する。

2. 論点①——呼称の問題

本稿ではトルコ国民として暮らすヌサイリー／アラウィーの人々を指してアラブ・アレヴィーという呼称を用いている。しかし、実は彼らを何と呼ぶかという呼称の問題自体が、アラブ・アレヴィー研究において繰り返し論じられてきた点のひとつである。その理由としては、現代トルコのアラブ・アレヴィーが、シーア派分派としてのヌサイリー／アラウィーとトルコのアレヴィー諸集団というふたつの文脈のなかで捉えられるべき存在であるため、認識上の混乱を招きやすいということ、そして地域社会における彼らの自・他称自体も統一性を欠いているということがある。

アラブ世界において彼らの自・他称として知られているアラビア語のアラウィーという呼称は、前近代における彼らの他称であったヌサイリーという語を持つ異端的な含意に対し、自らのイスラーム性を強調する意図を持つ同派出身の知識人によって20世紀初頭に用いられて以降浸透していったものであることが、これまでの研究で指摘されている [Firro 2005: 9; Friedman 2010: 235]。そのアラウィーがトルコ語で発音・表記されると、アレヴィーになる。実際、現地社会のほとんどの人々が現在日常的に自称として用いているのは、アレヴィーである可能性が高い [齋藤 2007: 262]。しかし、単にアレヴィーといった場合、トルコの社会的な文脈においてはトルコ系、クルド系アレヴィーとの区別が難しく、混乱を招くおそれがあるという問題がある。そのため彼らが自らのアイデンティティを公的な場で発信する場合や学術的な議論においては、別の呼称を用いる必要性が出てくる⁵⁾。

これまでのトルコ国内における研究で最も多く用いられているのは、ヌサイリーという呼称である [Keser 2008; Sertel 2005; Tankut 1938; Türk 2005 など]。この呼称は現地の人々のあいだでは上述の背景もあり、外部の人間による蔑称であるとされるか、あるいは認知されておらず、学術的な文献やシェイフの著作等以外ではほとんど用いられないと認識する研究者がいる [Aslan 2005: 46; Mertcan 2013: 306; Türk 2005: 31]。一方で、フィールドのデータや文献資料から、そうした含意は必ずしも意識されておらず、この呼称に抵抗を持たない人々も存在するという報告もある [Keser 2008: 214; Procházka-Eisl and Procházka 2010: 21]。実際にはシェイフを筆頭にコミュニティの内部でも意見の対立が存在し、どちらの認識についても必ずしも間違いとは言えない状況にあるようである [Aksoy 2010: 201]。

他のアレヴィー集団との区別を意識するという点では、本稿が採用するアラブ・アレヴィーという呼称も先行研究においてしばしば用いられてきた [Keser 2005; Mertcan 2013; Uluçay 2010 など]。トルコ・アレヴィーがしばしばその起源とされる集団と関連付けてバクタシー・アレヴィーあるいはクズルバシュ・アレヴィーと呼ばれるように、ヌサイリーという呼称がアラブ・アレヴィーをその宗教的起源から捉えた用語であるのに対し、こちらは母語を基準とした区別であると言えることができる。この呼称の使用に対しても同様に反発は存在し、言語的・民族的背景と信仰を結びつけることに異論をもつ一部のシェイフは、ギュネイ・アレヴィー (Güney Alevi「南のアレヴィー」)、アクデニズ・アレヴィー (Akdeniz Alevi「地中海のアレヴィー」といった彼らの居住地域に由来する呼称を選んでいる [Aksoy 2010: 201; Procházka-Eisl and Procházka 2010: 20]。

5) ヌサイリー／アラウィー(アラブ・アレヴィー)とその他のアレヴィー諸集団の関係については、起源論の観点から否定されており、公的な交流関係もないとする見方がこれまでの研究では一般的である [Aringberg-Laanzatza 1998: 154]。アラウィーとアレヴィーという呼称に起因する研究上の混乱については、トルコ系アレヴィーを研究する佐島が日本で出版されているイスラーム辞典の記述を例に挙げて指摘している [佐島 2005: 2]。

他方、研究ではほとんど用いられないことがないローカルな呼称として、フェッラーフ (Fellah [小作人]) やアラブ・ウシャウ (Arap Uşağı [アラブの従僕]) といったものがある。彼らが伝統的に農業に従事してきたことに由来する前者の呼称は、現在では侮蔑的なニュアンスの強い他称として忌避される傾向も強いものの、一定の世代以上の人々は自称としても用いてきたという [Procházka-Eisl and Procházka 2010: 22]⁶⁾。

また、外国人研究者による数少ないアラブ・アレヴィー研究においては、本稿でも分派の一般的な名称として採用しているヌサイリー／アラウィー (Nusayri-Alawi) という呼称が用いられる傾向がある [Procházka-Eisl and Procházka 2010; Prager 2010 など]。ヌサイリー／アラウィー全般に関する思想史・歴史学的研究でも近年定着しているこの呼称は、トルコのその他のアレヴィー集団との区別を示すことができる上に、近現代における彼らの一般的な自称も含まれているという面では、バランスのとれたものである。しかしながら本稿では、トルコのその他のアレヴィーとの混同を避ける必要があるという認識にぐわえ、今後はそうした諸集団との関係の展開にも着目し、地域固有の文脈のなかで現れる宗派内部の多様性に注目した研究がなされるべきであるという立場をとる。そのため、今後もこうした彼ら自身の自己規定と他者による認識の錯綜した状況に注目しつつ、この研究領域においては、言語・民族的背景を基準とした相対的区別とアレヴィーという社会範疇への内包の双方を含意するアラブ・アレヴィーという呼称をひとまずは用いていくことを提唱したい。

3. 論点②歴史研究——オスマン朝期、共和国期、定住過程

オスマン朝期

近年のトルコにおけるオスマン文書史料を用いたアラブ・アレヴィー研究の動向を紹介した齋藤が指摘するように、アラブ・アレヴィー関連書籍の歴史叙述の傾向として、宗派の創世期である9世紀から始まり、スンナ派系王朝の支配下での弾圧や迫害にふれたあと、突然時代がフランス委任統治期に飛んでしまうという形がよくみられる [齋藤 2012: 185]。彼らの居住地がオスマン朝の支配下に入った16世紀から、トルコ共和国建国以降も含めた20世紀の動向についての史資料を用いた実証的な研究は、まだ端緒についたばかりである。

齋藤が同論考で取り扱うのは、これまでトルコ・アレヴィーを中心的に研究してきた国内の研究機関である「トルコ文化とハジ・ベクタシ・ヴェリー研究センター」(Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Merkezi) が発行する学術雑誌のうち、2010年に発行された「ヌサイリー特集号」である。この特集号には、社会学、文学、歴史学など多分野の研究者による13本の論文と、6本の史料紹介・文献目録・書評が掲載されており、アラブ・アレヴィーを主たるテーマとする初の論文集であるという点で画期的な研究成果である。

同雑誌では、オスマン文書史料や欧米各国の文献など様々な史資料におけるヌサイリー／アラウィーに関する記述に体系的に光を当てる試みがなされている。齋藤はこのうちオスマン文書史料を用いた4つの論文を検討し、その史料収集の方法や方針に疑問を呈しながらも、それらの研究から明らかとなった事実が、これまでのアラブ・アレヴィー像を一部打ち破るものであると評価している。その事実とは、まず「オスマン政府がアラブ・アレヴィーをイスラーム教徒とみなしたこと」であり、さらに「19世紀末、スンナ派に改宗することを望んだアラブ・アレヴィーが多いたこと」である。シェイフを中心に、彼らのあいだによくみられる歴史認識は、アラブ・アレヴィー

6) 社会学を専攻しアダナでフィールドワークを行った Aslan は、そうした事情を理解しつつもなぜか自身の研究書 [Aslan 2005] のタイトルに、一般的ではないこの呼称を採用している。

は一貫してスンナ派から弾圧を受けてきた、彼らの信仰はそうした迫害にも関わらず現代まで連続と守られてきたというものであり、これらの論文から明らかになった一部の歴史的事実とのあいだにはズレがあることになる〔齋藤 2012: 190〕。オスマン朝をめぐる国際関係のなかでアラブ・アレヴィーの存在が欧米やオスマン中央政府の関心を集め、史料が増加する 19 世紀の動向に関しては、〔Alkan 2012; Winter 2004〕等も扱っており、アラブ・アレヴィーに関する歴史研究では最も研究が集中している領域である。

共和国期

第一次大戦後に新たにできた近代国家のもとでの事情に関しては、シリア政治とアラウィー派の関係について研究が盛んに行われる一方で、トルコ共和国の政治・社会史のなかでのアラブ・アレヴィーの動向についてはこれまでほとんど知られていなかった〔Mertcan 2013: 9〕。しかし、特に 2000 年代以降アラブ・アレヴィーに関する現代研究が急激に増加するなかで、ここ数年のうちに、この全く未検討であった領域についても光を当てる研究がいくつか行われている。

そのうちのひとつである〔Özdil 2013〕は、ナショナリズム研究の視点から、共和国初期における国家のアラブ・アレヴィー認識を当時の議会議事録等の史資料に基づいて分析した。Özdil によれば、シリアとのあいだに領土問題が存在したハタイ（アレクサンドレッタ）が 1939 年にトルコに編入されて以降、特にこの地域に多く暮らしていたアラブ・アレヴィーの国民統合が問題化した⁷⁾。ハタイ県には、現在でも国内で最も多くのアラブ・アレヴィーが集住している。この問題に対してトルコ政府がとった政策の基本方針は、アラブ・アレヴィーの民族的・宗教的「トルコ性」を主張する同化イデオロギーを広めることであった。

実際、アラブ・アレヴィーに対する学問的関心が高まる 90 年代以前の数少ない研究で目立つのは、彼らの起源論である。そうした研究では、共和国初期に喧伝されたトルコ人の「ヒットイト」起源説の延長として、アラブ・アレヴィーの起源をトルコ民族と結びつける主張が公然と行われた。代表的なものとしては、〔Tankut 1938〕がある。彼は、アラブ・アレヴィーが「人種的にも、宗教的にも、文化的にも我々と同じ人々である」〔Tankut 1938: 9〕と主張した。このような主張は現在でも一部の研究者やアラブ・アレヴィーのシェイフなどの認識・主張に影響を与えており〔Türk 2005: 34-37〕、単に多数派、国家の側の当時のイデオロギーを示す資料として歴史化すべきではないだろう⁸⁾。

Özdil の研究と同じく 2013 年に発表された Mertcan の単行本は、アラブ・アレヴィー社会の歴史的動向を、1 章で宗派の成立から書き起こし、2 章でオスマン朝の近代化時代を扱ったあと、3 章でトルコ共和国の現代までの政治・社会史との関連で扱う。文書史料、新聞記事、インタビューなど多彩な資料を用いた本書は、宗派の歴史をトルコのエスニック集団としてのアラブ・アレヴィーにつなげる形で扱った初めての研究である。特に共和国時代の動向については、本書から多くの新しい知見を得ることができる。例えば、オスマン朝時代に迫害を受けていたトルコ系、クルド系アレヴィーは伝統的に世俗主義政党である共和人民党を支持してきた場合が多いとされるが〔若松 2013:

7) 「ハタイ」という地名は、後述するようにトルコ人のヒットイト起源説に由来するものであり〔黒木 2013: 236〕、歴史的・社会的にみればシリア北部とも連続性をもっていたこの地域を新生トルコ共和国へ統合するという強い政治的意図を象徴している。

8) Procházka-Eisl and Procházka は、こうした主張を現代においても再生産している研究のひとつとして〔Türk 2005〕を挙げている〔Procházka-Eisl and Procházka 2010: 75〕。しかし同書において Türk は、むしろアラブ・アレヴィーの起源論のひとつとして Tankut などの著作を紹介しており、続いてアラブ・アレヴィーのトルコ起源を主張する言説は根拠のないものであると明言していることから〔Türk 2005: 36〕、この指摘は誤読に基づくものであろう。

25–26]、Mertcan は1950年の民主党政権誕生以降のアラブ・アレヴィーの人々の政治意識の分析から、この傾向をアラブ・アレヴィーにも当てはまるものとして一般化する見解に反論している。

アラブ・アレヴィーに関する歴史研究はまだ端緒についたばかりであり、本書のような広い時代を対象とした大胆な研究には実証的にまだ多くの問題がともなう。ただ、トルコ社会の転換期ごとに現代までのアラブ・アレヴィーの人々の政治・社会的意識や活動の動向の特徴を把握しようと試みている本書が、今後の研究のたたき台として持つ意義は大きい。また巻末にはアラブ・アレヴィー関連の共和国アーカイブの史料も掲載されている。

定住過程

アナトリア南東部地中海沿岸地域に、アラブ・アレヴィーの人々がいつ、どのような過程を経て定住したのかを知ることができれば、彼らの歴史経験や今日のアラブ・アレヴィー社会の構造を明らかにする上で重要な手がかりになる。しかし、これまでこの問題について決定的な研究は行われていない。唯一、アラブ・アレヴィーに関してトルコ語以外で書かれた初めてのモノグラフである [Procházka-Eisl and Stephan Procházka 2010] が、史料の不足にともなう困難を指摘しつつ、近年トルコ語にも翻訳された20世紀初頭の同派出身知識人の著作 [Et-Tavil 2012] や旅行記等の記述を手がかりに定住史の再建を試みている。彼らは、少なくとも18世紀にはシリア北部での人口増加や内部紛争、自然災害などが要因となり、現在ハタイ、アダナ、メルシンの各県が所在する地域へのアラブ・アレヴィーの移住が始まったと結論づけている。さらに、こうした移住は国家の政策や部族単位の決定として大々的に行われたというより小規模で徐々に進んだとみるべきであり、そのことは現在のトルコのアラブ・アレヴィー社会において部族構造がそこまで重要性をもっていないことに反映されているという [Procházka-Eisl and Stephan Procházka 2010: 56–57]。このテーマについても、今後も新たな研究が行われることが望まれる。

4. 論点③人類学・社会学研究——信仰実践・社会生活とその変化

2000年代以降のアラブ・アレヴィー研究の最大の特徴は、国内外の研究者によりフィールド調査のデータから彼らの宗教実践や社会生活の実態に迫る研究が相次いで発表されていることである。

90年代後半からハタイで調査を行っている Türk の研究成果は、2点の単行本 [Türk 2002; 2005] に結実している。宗教人類学的な見地からアラブ・アレヴィーの信仰実践に関心をもつ Türk は、1作目で彼らのあいだに見られるフズル信仰⁹⁾ に焦点を当て、2作目ではより広く社会構造、集団儀礼、祭礼、死生観などのテーマを扱った。

アラブ・アレヴィーの信仰を「閉鎖的な社会・文化的システム」[Türk 2005: 279] と分析する彼は、調査にともなった困難を吐露しつつも、シェイフをはじめ現地の人々と信頼関係を築き、貴重なデータを集めた。彼の研究の意義は、概説書の類にみられるように信仰や宗教実践について単にその概要を記述するのではなく、それらの社会的機能にまで目を向け、まさにひとつの社会・文化的システムとしてアラブ・アレヴィーの生活を捉えようとしていることにある。とりわけ、彼がアラブ・アレヴィーの宗教伝統の二つの柱であると考えるタアウィール(聖典の比喩的な解釈)とタキーヤ(信仰隠し)の実践及び継承において、少年のイニシエーションの際に結ばれる擬制的な親族関係がもつ役割の重要性と、近年の社会変化にともなうその実態の変容を明らかにした点は評価に値

9) ハタイにおけるフズル信仰に関するフィールド調査に基づくその他の研究として、文学研究者として知られるバフチンの提唱したクロノトープの概念を用い、参詣の場で体験される時空間を分析した [Kreinath 2014] がある。

する¹⁰⁾。ただし、Türk の行ったようにアラブ・アレヴィー社会の内的論理の理解を試みる研究は重要である一方で、そうした機能主義的なアプローチがコミュニティの閉鎖性といった特徴を本質化する方向に向かいがちであることも、指摘しておかなければならない。

アラブ・アレヴィーについてトルコ語以外で書かれた初めてのモノグラフである [Procházka-Eisl and Procházka 2010] は、渉猟した史資料や収集した民族誌的データの豊富さと、それらに対する分析の両面で、近年のフィールド調査に基づくその他の研究とは一線を画す出来栄の労作である。彼らの当初の目的はキリキア地方のアラビア語使用に関する言語学的な調査であったが、現地の人々との交流を通じてアラブ・アレヴィーのアイデンティティや信仰実践の問題についても関心を持ち、本書では彼らの参詣する聖所を中心に詳細なデータを提示している¹¹⁾。

アラブ・アレヴィー社会においては、女性は集団儀礼への参加及び秘伝的知識へのアクセスを禁じられており、そうした女性たちにとって聖所は自らの信仰を实践する主要な場でもある¹²⁾。本書 242-316 頁に掲載されるアダナ、メルスィン周辺の聖所の所在や構造、来歴等を記したリストは、彼らが十数年にわたり繰り返した短・中期的調査のあいだに足で稼いだ貴重なデータであり、今後同様のテーマで行われる研究に大いに資するものである。また、彼らのアイデンティティと密接に関わるアラビア語話者の減少についても、言語学者ならではの洞察の深さをうかがえる。

あえて本書の欠点を挙げるとすれば、次の二点を指摘することができる。ひとつは、彼らが中心的テーマに据える聖所について、アラブ・アレヴィーの定住過程やスンナ派中心のイスラーム主義の台頭といった事柄との関連には言及しつつ、同様に聖者信仰が盛んな国内のその他のアレヴィー集団との比較の視点が少ない点である。次に、聖所参詣とともにアラブ・アレヴィーの信仰生活のもうひとつの重要な側面である集団儀礼やイニシエーションといったテーマについては一般的な記述にとどまっている点は、本書の内容の充実ぶりを考えるとやや残念である。

上述の [Procházka-Eisl and Procházka 2010] が扱っていないふたつの領域のうち、後者に関連する社会的側面を取り上げたものに、[Erdem 2010] がある。[Erdem 2010] は、タキヤ実践というこれまで研究の障害でこそあれ対象とはみなされてこなかったアラブ・アレヴィー社会の重要な特徴に正面から取り組んだ初めての研究である。この研究において Erdem は、秘密の社会的な構築性に着目してきた社会学・人類学における宗教集団と秘密主義の関係に関する研究蓄積を理論的枠組みとして、地域の人々の自らの信仰の秘密性に対する理解、またそうした信仰の維持・伝承を支えるシステムや実践とその変容を、メルスィンでのフィールド調査及びアラブ・アレヴィーの人々が参加するオンラインコミュニティにおける議論の分析という手法を用いて論じた。

高学歴化や都市化、外婚の増加といった社会変化にともない、宗教教育や信仰実践に対する葛藤や認識のズレが人々のあいだで増しており、地域社会レベルでそうした伝統を支えてきたシステムそのものも衰退を与儀なくされている。インターネット上では、高学歴の若者を中心に彼らの信仰の秘密性が多数派からの差別につながっていると考える「開示派」が現れ、秘密へのアクセスを許されていない女性がそれに賛同するという反応が起きている。他方、秘密の維持は彼らのアイデンティティの根幹に関わる問題であり、安易な開示は決して行うべきではないと考える人々も当然な

10) このテーマに関しては、ヌサイリー／アラウィーの思想や歴史を包括的に扱う近年の代表的な研究書においても僅かに1ページほどの分量の記述がみられるのみであり [Friedman 2010: 221-222]、その実態についていかに情報が不足していたかがうかがえる。

11) 彼らの言語学的調査の成果は、本書刊行以前にも [Procházka 1999; 2002a; 2002b] として発表されている。

12) 女性の置かれた宗教的立場の違いは、国内の他のアレヴィー集団との顕著な文化的差異の例として挙げられることがよくある [Andrews 1989: 153; Güneş 2013: 195]。

がら存在する。「秘密性について全ての人々のあいだに平準的な理解があるわけではない」[Erdem 2010: 171] という Erdem の一言は、これまでの研究において彼らの社会の秘密性＝閉鎖性が繰り返し強調され、本質化されてきたことを考えれば、大きな進歩である。ただ、同研究は修士論文であることもあり、具体的なデータの量や議論の展開には物足りなさがある。Erdem の最大の貢献は、タキーヤ実践というアラブ・アレヴィーの信仰実践やアイデンティティを扱う研究においてのある種のアポリアに今後取り組んでいくために、そのアプローチのひとつを示したことにある。

アラブ・アレヴィー研究の関心が彼らの教義や信仰実践といったいわゆる「伝統」に集中しがちな一方で、都市化や移民といったローカルなコミュニティを超える社会変化や、他宗教・宗派及びエスニック集団とのあいだの社会関係を視野にいれた研究も現れ始めている。そうした研究のうちの代表的なものは [Keser 2008] である。Keser は、文化や出自の多様性に特徴づけられる都市空間において、言語的・宗教的少数派であるアラブ・アレヴィーの人々のエスニシティがどのように生成・変容しているのかを、公共領域に関する議論や都市におけるエスニシティの研究を参照しつつ、フィールド調査のデータに基づき論じた。

彼のフィールドであるアダナは、肥沃なチュクロヴァ平野の中心に位置するトルコ有数の農業地帯である。Keser はこの地域の社会・経済発展史を振り返り、特に地域の発展において中心的な役割を果たしてきた農業分野の産業化が進んだ結果、都市への移住が増え、エスニック集団の社会生活にも大きな影響を及ぼしたことに注目する。こうした環境の変化にともない、アラブ・アレヴィー社会でも彼らが伝統的に従事してきた農業から離れ、様々な職業に就く人々が出てきた。1970年代後半以降は高学歴化も加速し、経済的に中流・上流の人が増えた結果、それまでコミュニティ内で大きな影響力を持ってきたシェイフの社会的権威の低下が目立つようになる。これらの社会変化は、アラビア語話者の減少と宗教実践の形骸化につながり、彼らのエスニック・アイデンティティにも影響を与えている。さらに、彼らが集住するマハッレ(街区)から新興住宅地への移住が進み、コミュニティの非均質化も進んだ。

今日、Keser が自宅や職場、市民団体などを例として挙げるアダナのアラブ・アレヴィー社会の公共領域も、こうした変化にどのように対応していくかという点を巡って展開している。そこでは、市民社会の形成を通じた解決を志向する中流・上流に属し高学歴の人々と、シェイフの権威を支持し、伝統の再興によって対応していこうとする低所得者層のあいだに大きな溝が生まれているという。彼がアラブ・アレヴィー社会の公共領域として取り上げているデルネキヤワクフなどの市民団体は、今日のトルコにおいてエスニック集団のアイデンティティに関する議論や主張が繰り返し広げられる主要なメディアの役割を果たしており、今後その活動実態についてさらなる研究が行われていく必要がある¹³⁾。

近年の人類学・社会学分野の研究として最後に、ドイツに移住したアラブ・アレヴィーのコミュニティを対象に、トランスナショナルな移住と親族関係の変容という視点から論じたモノグラフである [Prager 2010] を挙げておきたい。

全7章から成る本書では、1～3章で理論的枠組みの提示や先行研究の整理が行われたあと、主に4～6章で Prager 自身のフィールド調査のデータが提示される。彼女が主に注目するのは、イニシエーションを通じて初めて秘伝的知識を与えられるアラブ・アレヴィーの男性の儀礼的なライフサイクルや、彼らのあいだで用いられる、アラビア語とトルコ語の親族語彙、内婚を基本とした結

13) より地域性に重点を置き、ハタイにおける多民族・多文化共存というテーマの一部としてアラブ・アレヴィーにもふれているものとして、Doğruel による研究 [Doğruel 2005; 2009; 2013] がある。

婚戦略などである。

本書はアラブ・アレヴィーの社会生活と彼らの信仰の関わりについて多くの新しい知見を与えてくれる一方、その記述の方法や結論には疑問が残る。Prager はしばしば文脈や対象が曖昧な形で事例を提示しているほか、彼女の記述は内婚といった社会規範の存在を過度に一般化しており、日常生活のなかで観察されるであろうであろう現実の多元性がそこからはあまり伝わってこない。そうした欠点はあるが、これまで欧州やオーストラリアのトルコ系、クルド系アレヴィー移民に関しては多数の研究がある一方、アラブ・アレヴィーの国外での動向に関する研究は全く存在していなかったことを考えると、本書の貢献は大きい。この研究は、近年のアラブ・アレヴィー研究の広がり象徴するものであると言えよう。

5. おわりに

本稿で概観してきたように、トルコのアラブ・アレヴィー研究は、この領域に対する学術的関心の高まりが顕著になって以来わずか15年余りの歳月しか経っていないことを考慮すれば、研究の蓄積、視座の広がりともに驚くべき充実ぶりを見せている。とりわけ、フィールド調査に基づく研究により、これまでの思想史・歴史研究が中心のヌサイリー／アラウィー研究においてはほとんど未検討であった彼らの宗教実践や社会生活の実態が明らかにされ始めており、今後は理念と実態の両面から彼らの社会・文化を理解することを目指した研究が期待できる。

今後の研究に求められる課題として、以下の数点を挙げておきたい。まず、これまでの研究には、集団儀礼や聖所参詣といった予め決められた項目的なトピックに沿ってデータを集めるようなスタイルや、インタビューやアンケートの回答を文脈や背景を明示しないまま引用するような場合が見えられ、事例を突き合わせた比較研究を行うことが難しいという問題がある。今後は、対象や時空間をより限定した特定の事例について深く分析するような手法も模索されるべきであろう。

もうひとつは、アラブ・アレヴィーとトルコのその他のアレヴィー集団との関係についてである。ヌサイリー／アラウィー研究においてシリアの事情への関心の偏りが見られたのと同様に、これまでアレヴィー研究においても、アラブ・アレヴィーはやや特殊な存在として周縁化されてきた。呼称の類似と研究の少なさからしばしば混同されてきたトルコ系、クルド系アレヴィーとヌサイリー／アラウィー（つまりアラブ・アレヴィー）の関係については、ほとんどの研究者が両者の起源論の観点から区別を促すにとどまっており、現代トルコ社会空間において両者がどのような影響関係にあるかはいまだ十分に明らかになっていない。本稿でも見てきたように、例えばトルコ国内でこれまでトルコ・アレヴィーを中心的に研究してきた研究機関が、アラブ・アレヴィーをも対象とし始める動きがある。トルコにおけるアレヴィー研究とアレヴィー諸集団の関係は単純ではなく、メディアを通じて発せられる市民団体や知識人の主張と、国内外の研究者の見解、そしてフィールドに暮らす人々の認識は互いに食い違うこともあれば、影響を与えあうこともあるため、特に国内の出版物に関しては、著者や発行元がどのような背景をもつのかという点も十分検討する必要がある [若松 2010: 5-6]。その上で初めて、こうした新しい動向についてもそれがどのような主張や認識に基づくものであるか判断できよう。

最後に付け加えたい点として、近年のシリア内戦により、トルコへの大規模な難民の流入が起きていることは無視できない展開である。トルコの近現代政治・社会史の文脈にアラブ・アレヴィー社会の動向を位置づけた Mertcan は、2011年以降トルコ国内でアラブ・アレヴィーに対する疑念に基づくヘイト・スピーチが見られるようになったと述べている [Mertcan 2013: 350]。シリア内戦と

難民の流入がアラブ・アレヴィー社会に及ぼしているこうした直接的・潜在的な影響や変化についても、今後の研究が待たれる。

参考文献 (引用文献及びアラブ・アレヴィー関連先行研究リスト)

<日本語>

菊地達也 2014 「極端派(グラート)の伝統とアラウィー派」近藤洋平(編)『中東の思想と社会を読み解く』東京大学中東地域研究センタースルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座, pp. 109-130.

黒木英充 2013 「シリア・トルコの国境問題——劇的な変転」黒木英充(編)『シリア・レバノンを知るための64章』明石書店, pp. 234-239.

齋藤久美子 2007 「トルコにおけるアラブ・アレヴィー」佐島隆(編)『「アレヴィー・ベクタシ」集団のエスニシティと社会的・文化的秩序の変化と持続——トルコ・ヨーロッパにおけるトルコ系集団を中心として——調査研究・論考編』大阪国際大学人間学部国際コミュニケーション学科, pp. 262-269.

—— 2012 「トルコにおけるアラブ・アレヴィー研究——オスマン文書史料からのアプローチ」佐島隆編『アレヴィー関連諸集団とアレヴィー・エスニシティの生成と展開——トルコ及びヨーロッパ——調査報告・論考編』大阪国際大学人間学部国際コミュニケーション学科, pp. 185-192.

佐島隆 2005 「トルコ共和国におけるアレヴィー集団の社会的文化的現在——カイセリ県におけるアレヴィー系協会と諸集落」『国際研究論叢——大阪国際大学紀要』18(3), pp. 1-16.

若松大樹 2010 『アレヴィー関係基本文献目録』(SIAS working paper series 7) 上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究拠点.

—— 2013 「グローバルな状況下における民族誌記述に関する諸問題——クルド系アレヴィーの民間信仰と聖者崇敬をめぐって」『日本大学文理学部人文科学研究 研究紀要』86, pp. 23-36.

<トルコ語>

Akbulut, Uğur. 2010. “Osmanlı Arşiv Belgelerinde Lazkiye Nusayrîleri (19.Yuz yıl),” *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 111-125.

Aksoy, Erdal. 2010. “Nusayrîlerin Sosyal Yapıları ve Cumhuriyetin İlk Yıllarında Türkiye’de Yaşayan Bu Topluluğa Devletin Yaklaşımları,” *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 199-212.

Akyol, Esra Demirci. 2010. *Sınırdaki Kimlikler: Türkiye’ye İlhak Sürecinde Hatay*. İstanbul: Libra Yayınevi.

Alkan, Necmettin. 2010. “Alman Kaynaklarına Göre Osmanlı Nusayrîleri,” *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 135-148.

Arayancan Atıcı, Ayşe. 2010. “Suriye Bölgesinde İki İnanç Hareketi: Nizârî İsmâîlîleri ve Nusayrîlik,” *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 183-198.

Arpa, Abdulmuttalip and Kasım Ertaş. 2012. “Bâtınî Düşüncede Tevil ve Nusayrîlik,” *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 62, pp. 289-304.

Artun, Erman. 2001. “Adana’da Törenlere, Adaklara, Özel Günlere Ait İnanışlar, Pratikler ve Bunlara Bağlı Mutfak Kültürü,” *Millî Folklor* 49, pp. 27-37.

Aslan, Cahit. 2003. *Etnisite ve Kimlik: Nusayri ve Çerkezler üzerine bir Karşılaştırma*. Basılmamış Doktora Tezi, Ankara Üniversitesi.

- . 2005. *Fellahlar'ın Sosyolojisi: Arapşakları, Nusayriler, Hasibiler, Kilaziler, Haydariler, Arap Alevileri*. Adana: Karahan Kitabevi.
- Ayhan, Aydın. 2006. *Günümüz Alevi, Bektaşî, Mevlevî, Nusayrî: İnanç ve Toplum Önderlerinin Görüş ve Düşünceleri*. İstanbul: Cem Vakfı.
- Bağrı, Resul. 2014. *Türkiye'de Yaşayan Arap Alevilerinin Etnik ve Müzikal Kimliği*. Basılmamış Doktora Tezi, İstanbul Teknik Üniversitesi.
- Baha Said. 2000. *Türkiye'de Alevî-Bektaşî, Ahi ve Nusayrî Zümreleri: İttihat ve Terakkî'nin Yaptığı 'Anadolu'da Gizli Mabetler' Konulu Araştırmalar*. Ankara: T.C. Kültür Bakanlığı.
- Balıkçı, Gülsen. 2000. "Hatay Alevilerinde Evlenme Gelenekleri," in *Türk Halk Kültüründen Derlemeler 2000*. Ankara: Kültür Bakanlığı. pp. 39–68.
- Batuman, Suzan. 2003. *Adana Nusayrileri Dini İnanışlar-Törenler-Halk Kültürü*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Çukurova Üniversitesi.
- Batur, Muhammet Raşit. 2013. "Nusayriliğin Teşekkülü ve İnanç Esasları," *İnsan & Toplum* 3(5), pp. 55–84.
- Beşe, Ahmet. 2010. "İngiliz ve Amerikan Kayıtlarında Nusayriler," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 159–182.
- Bezgin, Ali. 2011. *Hatay'da Reenkarnasyon Memoratları*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Cumhuriyet Üniversitesi.
- Bilgili, Ali Sinan. 2010. "Osmanlı Arşiv Belgelerinde Adana, Tarsus ve Mersin Bölgesi Nusayrileri (19–20. Yüzyıl)," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 49–78.
- Bilgili, Ali Sinan et al. 2010. *Osmanlı Arşiv Belgelerinde, Nusayriler ve Nusayrîlik (1745–1920)*. Ankara: Gazi Üniversitesi Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Merkezi.
- Coşkun, Eyyup and İbrahim Özen. 2010. "Hatay'da Bir Kanaat Önderi: Hasan Ay," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 315–322.
- Demir, Tazegü ve Nazife Özdemir. 2010. "Avrasya Televizyonu'nda Yayımlanan '48 PERŞEMBE' Adlı Programda Nusayrilerle Yapılan Söyleşi," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 267–275.
- Demirbaş, Esin. 2004. *Etnik Azınlıklar, Kültürel Entegrasyon ve Medyada Temsil: Nusayrî Topluluğu Örneği*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Ankara Üniversitesi.
- Doğruel, Fulya. 2005. *İnsanîyetleri Benzer...: Hatay'da Çoketnili Ortak Yaşam Kültürü*. İstanbul: İletişim Yayınları.
- Dönmez, Mehmet. 2010. "Hatay Aleviliğinde İnanç Önderlerinin İbadeti İdrak Ediş Tarzları," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 213–223.
- Durdu, Aydın. 2010. "Hatay Nusayrilerinde Eren İnanıcı ve İnanç Merkezleri," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 255–266.
- Ener, Kasım. 1967. *Adana Tarihine ve Tarımına Dair Araştırmaları (Suriye'nin İddiasına Karşılık)*. Adana: Türközü Matbaası.
- Er, Abdullah. 2010. "Fransızca Yazılı Kaynaklarda Nusayriler," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 149–157.
- Er, Piri. 2010. "Sözlü Gelenekten Derlemelerle Hatay Alevileri (Nusayriler) ve İnanç Esasları," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 277–289.

- Et-Tavil, Muhammed Emin Galib. 2012. *Arap Alevileri Tarihi*. çev: İsmail Özdemir, Adana: Karahan Kitabevi.
- Fiğlalı, Ethem Ruhi. 1990. *Çağımızda İtikadi İslam Mezhepleri*. Ankara: Selçuk Yayınları (4.baskı).
- Göde, Halil Altay and Hüseyin Kürşat Türkan. 2015. "Karaağaç Arap (Nusayri) Alevilerinde Ölüm İnançları ve Ritüelleri Üzerine bir İnceleme," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 73, pp. 67–87.
- Gülççek, Ali Duran. 2005. "Nusayri Aleviler," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 34, pp. 269–280.
- Gülşehri, Ali and Reşit Tatlıdil. 1982. *Nusayrilik ve Suriye'de Nusayri Zulmü*. İstanbul: Nizam Yayınevi.
- Gün, Doğan. 2005. "XVIII. Yüzyılda Antakya'da Şeyhlerin Köylerdeki İdarecilik Fonksiyonları," *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Tarih Bölümü Tarih Araştırmaları Dergisi* 37, pp. 277–288.
- . 2006. *XVIII. Yüzyılda Antakya'nın Sosyal ve Ekonomik Yapısı (1708-1777)*. Basılmamış Doktora Tezi, Ankara Üniversitesi.
- Güneş, Muharrem. 2013. "Arap Aleviliğinde Kadının Yeri: Hatay Örneği," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 66, pp. 189–212.
- İşoğlu, İlker Mustafa. 2005. *Nusayrilerde İnanç Bağlamında Etnisite ve Toplumsal Cinsiyet İlişkileri*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Hacettepe Üniversitesi.
- Kaçar, Cengiz. 2003. *Arap Alevi-Nusayrilerin Dini ve Sosyal Hayatı (Tarsus Örneği)*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Dicle Üniversitesi.
- Karasu, Mehmet. 2006. *Nusayrilik Alevilik ve Çokkültürlülük*. Ankara: Keşif Yayınevi.
- Keser, İnan. 2002. *Gelenek-Görenek, Aile, Etnik Köken, Ekonomi, Siyaset, Tarih ve Din Açısından Nusayriler: Arap Aleviliği*. İstanbul: Chivi Yazıları.
- . 2005. *Nusayrilik: Arap Alevileri*. Adana: Karahan Kitabevi.
- . 2008. *Kent Cemaat Etnisite: Adana ve Adana Nusayrileri Örneğinde Kamusalılık*. Ankara: Ütopya Yayınları.
- . 2013. *Nusayri Alevilik: Tarih İnanç Kimlik*. Adana: Karahan Kitabevi.
- Kineşçi, Erdinç. 2010. *Nusayri Kimliğinin Oluşumunda Siyasal Katılım, Tercihlerin Etkisi ve Partilerin Rolü: Hatay Örneği*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Hacettepe Üniversitesi.
- Kiremit, İlker. 2012. *XIX. Yüzyılda Nusayriler: Arap Alevileri*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Hacettepe Üniversitesi.
- Kılıç, Firdevs. 2002. *Hatay Nusayrilerinde Haydarilik*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Erciyes Üniversitesi.
- Melikoff, İrene et al (haz). 1999. *Tarihî ve Kültürel Boyutlarıyla Türkiyede Aleviler, Bektaşîler, Nusayriler*. İstanbul: Ensar Neşriyat.
- Mertcan, Hakan. 2013. *Türk Modernleşmesinde Arap Aleviler (Tarih Kimlik Siyaset)*. İstanbul: Karahan Kitabevi.
- Onarlı, İsmail. 2006. *Arap Aleviliği: Nusayriler*. İstanbul: Etik Yayınları.
- Över, Gökben. 2011. *Nusayrilerde Kadın*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Gaziantep Üniversitesi.
- Özbek, Tarık. 2006. *Nusayri Etnik Kimliğinin Simgesel Oluşumu*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Mustafa Kemal Üniversitesi.
- Palabıyık, M. Hanefi. 2010. "Dini İnançları ve Özellikleri Bakımından Nusayrilik," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp. 19–48.

- Sertel, Ergin. 2005. *Dini ve Etnik Kimlikleriyle Nusayriler*. Ankara: Ütopya Yayınları.
- Sinanoğlu, Abdülhamit. 1997. *Nusayrilerin İnanç Dünyası ve Kutsal Kitabı: Çağımızda Batınlık Örneği*. İstanbul: Esra Yayınları.
- Soğukoğlu, Fehmi. 2013. "Nusayrilik ve Tanrı Algıları," *Kelam Araştırmaları* 11, pp.487–500.
- Tankut, Hasan Reşit. 1938. *Nusayriler ve Nusayrilik Hakkında*. Ankara: Ulus Basımevi.
- Temizkan, Mehmet. 2010. "Alevi-Bektaşî Edebiyatında Nusayrilik," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp.243–251.
- Togayhan, Abdurrahman. 2005. "Kültürel Farklılıklar Ekseninde Nusayrilik Üzerine Bir Din Sosyolojisi Araştırması: Mersin Arap Aleviliği Örneği," *Harran Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi* 14, pp.57–91.
- . 2006. "Ali Kültürünün Oluşumuna Etkili Olan Tarihi-sosyal Fenomenlerin Nusayri İdraktteki Tezahürlerine Sosyolojik Bir Yaklaşım: Mersin Arap Aleviliği Örneği," *Harran Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi* 15, pp.67–95.
- . 2008. "Günümüz Paralel Nusayrilik İncancına Yansıyan Senkretizmin Temel Formları: Mersin Karaduvar Mahallesi Örneği," *Harran Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi* 20, pp.227–258.
- Tozlu, Selahattin. 2010a. "Osmanlı Arşiv Belgelerinde Antakya ve İskenderun Nusayrileri (19. Yüzyıl)," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp.79–110.
- . 2010b. "Nusayriler ve Nusayrilik Bibliografyası," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp.323–350.
- Turan, Ahmet. 1996. "Kitabu'l-Mecmu'nun Tercümesi," *Ondokuz Mayıs Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi* 8, pp.5–18.
- Turan, Fatma Ahsen. 2010. "Nusayrilerde Gadir Hum, Fıraş ve Mubahale Bayramları," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp.291–297.
- Türk, Hüseyin. 2001a. "Hatay'da Gadir Bayramı," *Folklor/Edebiyat* 26, pp.89–96.
- . 2001b. "Nusayrilik: İnanç Sistemleri ve Kültürel Özellikleri," *Folklor/Edebiyat* 28, pp.127–144.
- . 2002. *Nusayrilik (Arap Alevilik) ve Nusayrilerde Hızır İncancı*. Ankara: Ütopya Yayınları.
- . 2005. *Anadolu'nun Gizli İncancı Nusayrilik: İnanç Sistemleri ve Kültürel Özellikleri*. İstanbul: Kaknüs Yayınları.
- . 2009. *Kültürlerin Bin Yıllık Hoşgörüsü: Evliyalar Diyarı Hatay*. Adana: Karahan Yayınevi.
- . 2010a. "Nusayrilerde Hızır İncancı," *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp.225–242.
- . 2010b. "Hatay'da Müslüman-Hıristiyan Etkileşimi: St. Georges ya da Hızır Kültürü," *Milli Folklor* 85, pp.138–147.
- . 2012. "Hatay Türbe İncancının Sağlık Antropolojisi Açısından İncelenmesi," *Milli Folklor* 94, pp.91–104.
- Türkel, Rifat. 2001. *İnanç Esasları Açısından Nusayrilik-Alevilik Mukayesesi*. Basılmamış Yüksek Lisans Tezi, Marmara Üniversitesi.
- Uluçay, Ömer. 1996. *Arap Aleviliği: Nusayrilik: Araştırma-İnceleme*. Adana: Gözde Yayıncılık.
- . 1999. *Arap Aleviliği Nusayrilik*. Adana: Gözde Yayıncılık.
- . 2002. *Tarihte Nusayrilik*. Adana: Gözde Yayınları.
- . 2003. *Nusayrilik: İnanç Esasları Tenasuh Reenkarnasyon*. Adana: Karahan Yayınevi.

- . 2010. *Arap Aleviliği / Nusayrilik*. Adana: Gözde Yayınları.
- . 2011. *Nusayrilik: İnanç Esasları Tenasuh*. Adana: Gözde Yayınları.
- . 2013. *Alevi Nusayrilik / İtikat-Folklor / Selman-ı Farisi*. Adana: Gözde Yayınları.
- Ünverdi, Mustafa. 2004. “Kuranda Ahiret İnancı Bağlamında Adana ve Hatay Bölgesindeki Tenasüh ve Reenkarnasyon İnançlarının Değerlendirilmesi,” *Çukurova Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi* 4(2), pp.278–301.
- Ürkmek, Naim ve Aydın Efe. 2010. “Osmanlı Arşiv Belgelerinde Nusayrîler Hakkında Genel Bilgiler,” *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp.127–134.
- Üzüm, İlyas. 2000. “Türkiye’de Alevî/Nusayrî Önderlerinin Eserlerinde İnanç Konulanna Yaklaşım,” *İslam Araştırmaları Dergisi* 4, pp.173–187.
- . 2007. “Nusayrîlik,” *Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi* 33, İstanbul: TDV. pp.270–274.
- Yenmiş, Nihad. 2010. “Arap Aleviliğinde Kutsal Günler ve Bayramlar,” *Türk Kültürü ve Hacı Bektaş Veli Araştırma Dergisi* 54, pp.299–314.

<ヨーロッパ諸語>

- Alkan, Necati. 2012. “Fighting for the Nuşayrî Soul: State, Protestant Missionaries and the ‘Alawîs in the Late Ottoman Empire,” *Die Welt des Islams* 52(1), pp.23–50.
- Andrews, Peter Alford ed. 1989. *Ethnic Groups in the Republic of Turkey*. Wiesbaden: Ludwig Reichert Verlag.
- Aringberg-Laanzta, Marianne. 1998. “Alevis in Turkey: Alawites in Syria: Similarities and Differences,” in Tord Olsson, Elizabeth Özdalga and Catherina Raudvere (eds.), *Alevi Identity: Cultural, Religious and Social Perspectives*. İstanbul: Routledge, pp.151–165.
- Aswad, Barbara C. 1974. “Visiting Patterns among Women of the Elite in a Small Turkish City,” *Anthropological Quarterly* 47(1), pp.9–27.
- Bal, Idris. 1997. “The Turkish Model: The Place of the Alawites,” *Central Asian Survey* 16, pp.97–102.
- Bar-Asher, Meir and Arief Kofsky. 2002. *The Nusayrî-‘Alawî Religion: An Enquiry into Its Theology and Liturgy*. Brill.
- Dalkılıç, Mehmet. 2008. “Nusayriyah: An Esoteric Living Religious Sect in the Secular Milieu of Turkish Republic,” *İstanbul Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi* 17, pp.49–68.
- Doğruel, Fulya. 2009. “‘Conduct’ and ‘Counter-conduct’ on the Southern Border of Turkey: Multicultural Antakya,” *Middle Eastern Studies* 45(4), pp.593–610.
- . 2013. “An Authentic Experience of ‘Multiculturalism’ at the Border City of Antakya,” *Çağdaş Türkiye Tarihi Araştırmaları Dergisi* 13(26), pp.273–295.
- Douwes, Dick. 1993. “Knowledge and Oppression: The Nusayriyya in the Late Ottoman Period,” in *La Shi‘a Nell’impero Ottomano*, Roma: Accademia nazionale dei Lincei. pp.149–169.
- Erdem, Muharrem. 2010. *Secrets and Revelations: An Ethnographic Study of the Nusayri Community in the Karaduvar District of Mersin*. Unpublished Master’s Thesis, Middle East Technical University.
- Firro, Kais. 2005. “The Alawîs in Modern Syria: From Nuşayrîya to Islam via Alawîya,” *Der Islam* 82(1), pp.1–31.
- Friedman, Yaron. 2010. *The Nuşayrî-‘Alawîs: An Introduction to the Religion, History and Identity of the*

- Leading Minority in Syria*. Leiden: Brill.
- Kissling, Hans J. 1961. "Über Religiöses Brauchtum in der Cuqur Ova," *Bayerisches Jahrbuch für Volkskunde* 1961, pp. 41–45.
- Kreinath, Jens. 2014. "Virtual Encounters with Hızır and Other Muslim Saints: Dreaming and Healing at Local Pilgrimage Sites in Hatay, Turkey," *Anthropology of the Contemporary Middle East and Central Eurasia* 2(1), pp. 25–66.
- O'Rourke, Sheila. 2013. *Gender, Selfhood, and Media: Hatay in the Context of Turkish Modernities*. Vdm Verlag.
- Özdil, Zihni. 2013. "Nusayri Alawi in the Early Turkish Republic: Between Marginalization and Mimicry," Paper presented at British School of Middle Eastern Studies (BRISMES) Graduate Conference Oxford, United Kingdom, 8–9 May 2013.
- Prager, Laila. 2010a. *Die "Gemeinschaft des Hauses": Religion, Heiratsstrategien und Transnationale Identität Türkischer Alawi-/Nusairi-Migranten in Deutschland*. Münster: Lit Verlag.
- . 2010b. "Ames Sexuées et Idées de Procréation chez les Alawites/Nousairites (en Turquie)," *Anthropology of the Middle East* 5(2), pp. 77–99.
- . 2013. "Alawi Ziyara Tradition and Its Interreligious Dimensions: Sacred Places and Their Contested Meanings among Christians, Alawi and Sunni Muslims in Contemporary Hatay (Turkey)," *The Muslim World* 103(1), pp. 41–61.
- . 2013b. "Die Zeichen der Wiedergeburt: Körper, Stigmata und Seelenwanderung bei den Alawiten/Nusairiern der Südosttürkei," *Paideuma* 59, pp. 237–260.
- Procházka-Eisl, Gisela, and Stephan Procházka. 2010. *The Plain of Saints and Prophets: The Nusayri-Alawi Community of Cilicia (Southern Turkey) and Its Sacred Places*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Procházka, Stephan. 1999. "From Language Contact to Language Death: The Example of the Arabic Spoken in Cilicia (Southern Turkey)," *Orientalia Suecana* 48, pp. 115–125.
- . 2002a. *Die arabischen Dialekte der Çukurova (Südtürkei)*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- . 2002b. "Von der Wiedergeburt bei den Alawiten in Adana," in Werner Arnold and Otto Jastrow (eds.), *Sprich doch mit deinen Knechten aramäisch, wir verstehen es! : 60 Beiträge zur Semitistik ; Festschrift für Otto Jastrow zum 60*. Wiesbaden: Harrassowitz. pp. 557–568.
- Soysal, Mustafa. 1976. *Die Siedlungs- und Landschaftsentwicklung der Çukurova: mit besonderer Berücksichtigung d. Yüreğir-Ebene*. Erlangen: Palm und Enke [in Komm.].
- Talhamy, Yvette. 2008. "The Nusayri Leader Isma'îl Khayr Bey and the Ottomans (1854–58)," *Middle Eastern Studies* 44(6), pp. 895–908.
- . 2011. "American Protestant Missionary Activity among the Nusayris (Alawis) in Syria in the Nineteenth Century," *Middle Eastern Studies* 47(2), pp. 215–236.
- . 2012. "The Nusayri and Druze Minorities in Syria in the Nineteenth Century: The Revolt against the Egyptian Occupation as a Case Study," *Middle Eastern Studies* 48(6), pp. 973–995.
- Turan, Ahmet. 1973. *Les Nusayris de Turquie dans la Region de Hatay (Antioch)*. Paris.
- Türk, Hüseyin. 2004. "Alawi Syncretism: Beliefs and Traditions in Shrine of Hüseyin Gazi," *Journal of Religious Culture* 69, pp. 1–20.
- . 2005. "Alawism and Concealment: The Unclehood Tradition in the Nusayriye," in Hege Irene

- Markussen (ed.), *Alevis and Alevism: Transformed Identities*. Istanbul: The ISIS Press. pp.45–64.
- Van Bruinessen, Martin. 1996. “Kurds, Turks and the Alevi Revival in Turkey,” *Middle East Report* 26(3), pp. 7–10.
- Winter, Stefan. 2004. “The Nusayris before the Tanzimat in the Eyes of Ottoman Provincial Administrators, 1804–1834,” in Thomas Philipp and Christoph Schumann (eds.), *From the Syrian Land to the States of Syria and Lebanon*. Würzburg: Ergon Verlag, pp.97–112.